

【講義 2】 装訂・料紙について

落合 博志

一、はじめに

日本の古典籍において、装訂と料紙は、書誌の最も基本的な事項に属します。装訂や料紙によって、本の製作年代や、製作の環境・目的などが推定できる場合もあり、本の性質を知る上で不可欠の要素と言えます。

装訂・料紙とも少し込み入った話になりますので、あまり古典籍に触れた経験がないとすぐには飲み込めないかも知れませんが、慣ればそれほど難しいことではありません。この講義が、古典籍の装訂と料紙についての認識をさらに深めるきっかけとなれば幸いです。

二、日本の古典籍の装訂について

現在の書物では、「装訂」という言葉は表紙のデザインなども含むやや広い意味で使われますが、日本の古典籍においては、「装訂」は基本的に、紙をどのように使って一つの本を作るかを指します。

世界の書物の中での日本の古典籍の大きな特色として、装訂が多様であること、古くからの装訂が後代まで長く継承されたことが挙げられます。新しい装訂方法が考案されても、そのために古い装訂が減んでしまうわけではなく、さまざまな装訂が並存していました。

また、写本に特有で版本には見られない装訂があること、版本にもあるが分野が限られる装訂があることも特記されます。これは、日本の古典籍は写本が基本で、版本はその応用として作られたことと関係すると考えられます。

冊子本さつしほんにおいては、綴じ方こより（糸や紙縫などの通し方）にいくつかの種類があ

ります。綴じ方も装訂の一部ですが、装訂の分類は紙の使い方が第一で、綴じ方はその下に位置します。

三、日本の古典籍の料紙について

料紙は、本を製作するのに用いられた紙を指します。ただし本文とその前後にある序跋・目録などに用いられた紙を言い、表紙については含めません。なお表紙に本文と同じ紙が用いられている場合は、「本文共紙」と言います。

日本の古典籍の料紙は、楮こうぞの樹皮を原料とする楮紙、雁皮ちよしの樹皮を原料とする斐紙がんびが主要なもので、江戸時代以降は三桮みつまたの樹皮を原料とする三桮紙みつまたがみも使われました。楮と雁皮を交ぜて漉いた斐楮交漉紙ひちよまぜすきがみ、斐紙に泥土の粒子を混ぜて漉いた間合紙まにあいがみ（泥間合紙どろまにあいがみ）などもあります。

斐紙は繊維が詰まっていて表面が滑らかという特徴がありますが、雁皮は栽培が難しいため楮紙に比べて供給量が少なく、高級品でした。従って、斐紙を用いた本は、概して格の高い書物と言えます。

参考文献

関義城『古紙之鑑』木耳社、1977年

反町茂雄『歴代古紙聚芳』文車の会、1982年

竹田悦堂『書の和紙譜』雄山閣出版、1996年

装訂について —古典籍の装訂とその分類—

◎は写本に特有の装訂。

○は版本にもあるが、一般的でない装訂。

*を付した装訂名は仮称。

卷子本の類

かんすぼん 卷子本 ○

紙を糊付けして横に繋げて行き、左端に軸を付け、軸を中心にして丸く巻いたもの。右端に、巻いた紙の全体を覆うように表紙を付ける。表紙の端に細い竹や木が巻き込んであり（八双）、そこに巻紐はっそうを付ける。現存する日本最古の書物『法華義疏』ほっけぎしよがそうであるように、古くからある装訂法。版本にも見られるが、経典や写本の模刻本など分野が限られる。

なお冊子本（特に袋綴本）を解体して卷子本に直したものがしばしばあるので注意。その場合は「卷子本（袋綴改装）」などのように注記する。袋綴本の各丁を広げて繋げただけのものは、紙の中央に折り目の跡が残るので判別が容易であるが、折り目を切って巧妙に繋げたものは一見分かりにくい。虫食いの穴が線対称であることなどによって袋綴本の改装と判断できる。

つぎがみ 継紙 ○

卷子本と同じく紙を横に貼り継いだものであるが、表紙と軸がなく、紙を繋げただけの形態のもの。卷子本のように巻いてある場合は、「未装卷子本」あるいは「巻紙」とも言う。ただし丸く巻いていないものもあるので、一般的な名称としては「継紙」が適切である。

折本の類

おりほん 折本

糊付けして横に繋げた紙を、等間隔で山と谷を交互に作って折り畳んだもの。料紙の表側だけに書写したものと、料紙の裏側にも書写したもの（両面書写の折本）がある。

本来の折本のほか、卷子本を改装した折本がしばしばあるので注意。その場合は「折本（卷子本改装）」のように注記する。

おりじょう 折帖 ◎

一定の大きさの厚紙を横に繋げ、継ぎ目部分で折って畳んだもの。手鑑や短冊帖などに見られる装訂。形態上は折本と似ているが、折本では料紙の継ぎ目と折り目が原則的に無関係な点で区別される。版本の例は未見。

冊子本の類

〔単葉系〕

ふくろとじ 袋綴

紙を二つ折りにしたものを重ね、折り目と反対側の端を糸や紙縫こよりなどで綴じたもの（紙縫でいったん下綴じした後、更に糸でかが騰ることもある）。比較的時代が下がってから現れるように説くものもあるがそれは誤りで、仏書には平安時代後期（11c）からの例がある。ただし古くは糸綴じではなく、紙縫で結び綴じなどにしたものが多し。

おりがみとじ 折紙綴 ○

折紙（注）またはその半截を重ねて、端を糸や紙縫などで綴じたもの。帳簿類によく用いられ、「長帳綴」「横帳綴」あるいは「帳綴」と呼ばれることもあるが、一般的な名称としては「折紙綴」を用いるのが適当。連歌や俳諧の懐紙もこの装訂。版本にもあるが、八文字屋本の浮世草子や記録など、特定の種目に限られる。

（注）折紙＝横長の紙を、折り目が下（手前側）になるように二つ折りにした

もの。

たんようそう 単葉装 ○

一枚の紙を重ね、端を糸や紙縫などで綴じたもの。ジャンルに関わりなく見られる。

〔双葉系〕

でっちょうそう 粘葉装 ○

紙を二つ折りにし、外側の折り目脇の部分を糊代として、順次糊付けしたものの。しばしば「両面書写の粘葉装」と、紙を折った内側の面にだけ書写した「片面（内面）書写の粘葉装」があるように言われるが、実例はほとんど全てが両面書写である。比較的古い時代に限られるように説くものもあるがそれは誤りで、ある種の仏書（真言宗のしよそんほう諸尊法の柵形本など）では伝統的にこの装訂を用い、新しくは明治以降にまで及んでいる。

版本の例は、高野版や浄土真宗の和讃本など、ほぼ仏書関係に限られる。

そうようそう 双葉装 * ◎

紙の用い方は粘葉装と同じであるが、糊を使わず糸や紙縫などで綴じたもの。管見では天台宗や浄土真宗など仏書の例が多い。折紙を用いた「おりがみそうようそう折紙双葉装 * ○」もある。双葉装の版本は未見で、折紙双葉装はごく稀に版本の例がある。

なお、糊離れのした粘葉装の本を糸で繕って補修したものがあり、本来の双葉装と区別する必要がある。

〔複式双葉系〕

れっちょうそう 列帖装 ○

紙を複数枚重ねて二つ折りにしたもの（一括り・一折くく）を二つ以上並べ、糸や紐などで繋ぎ合わせたもの。各括りの折り目の部分に上下二つずつ、計4箇所おりの穴を開け、糸を順次通して行く綴じ方が一般的であるが、古くは紙縫など

で結び綴じにした例もある。紙の両面に書写する関係で、鳥の子や厚手の楮紙など墨が裏映りしにくい料紙を用いるのが普通（下記の「折紙列帖装」を除く）。年代の判明する最古の遺品は元永 3 年（1120）書写の元永本『古今和歌集』であるが、それより早く 10 c 末の真言宗の仏書や、11 c 初め～中頃の歌集の例がある。版本にも見られるが、一部の謡本や声明本など特定の種目にほぼ限られる。

「綴葉装」という呼び方もあるが、「葉」を「綴じる」のは粘葉装・画帖装以外の冊子本に共通の製本法で、特定の装訂の名称としてはふさわしくない。

なお、料紙に折紙を用いている場合は「^{おりがみれっちょうそう}折紙列帖装 ◎」と言う（「双葉列帖装」の名称は不可）。いずれにしても列帖装の一種である。折紙列帖装の版本は未見。

^{たんじょうそう}単帖装 * ◎

列帖装の一括りだけの形のもの。列帖装と異なり、折り目の部分の綴じ穴が 2 箇所だけのものもある。管見では仏書と歌書と謡本の例を確認している。版本の例は未見。

〔その他〕

^{がじょうそう}画帖装

紙を二つ折りにし、外側の、折り目と平行の端を糊付けして順次繋げたもの。主として、1 枚で完結する絵などを集めて冊子にする場合に用いられる。あまり古い例は見ず、江戸中期以降に工夫された装訂か。版本の例が多く、そちらが先行するかも知れない。

《冊子本の装訂の体系分類案》

◇紙の用い方による分類

〔単葉系〕 袋綴・折紙綴・単葉装

→ 1枚の紙が1単位で、それが1丁（1葉）になる

〔双葉系〕 粘葉装・双葉装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、それが2丁（2葉）になる

〔複式双葉系〕 列帖装・単帖装

→ 何枚かの紙を重ねて二つ折りにしたものが1単位で、それぞれの紙が2丁（2葉）になる

〔その他〕 画帖装

→ 1枚の紙を二つ折りにしたものが1単位で、通常1枚の紙ごとに内容が完結しており、「丁（葉）」を以ては数えにくい（「紙数〇枚」が妥当か）

◇綴じ方（糸や紙縫の通し方）による分類（*は仮称）

結び綴じ

^{かが} 膝り綴じ*（四つ目綴じ・五つ目綴じ・康熙綴じ、ほか）

^{してい} 紙釘装

背穴綴じ*

etc.

※装訂の分類基準は紙の用い方を第一にすべきで、綴じ方の違いはその下のレベル。